

見性成佛丸と記します。此の薬を丸呑に成させられますと、から見識と云ふものをはきまして、一生毒がぬけませぬ、随分々々能くくかみこなしてあがりますと、行くも歸るも、立つにも坐るにも、へその下へ呑込み置きますれば、たとひ天上に生れても樂まず、地獄へ落ちても苦まず、又誹るではござりませぬが、今時は六字丸と申して發行致しまするが、是は朝飯前夕飯後に御用ひなされれば、凡夫の保養には成りますれ共、斷末魔の苦みには、中々役に立ちませぬ。又世間の死に仕間に念佛丸と申すは、是でござります。此の薬には、代物が三錢宛入りますが、私が成佛丸には、一錢も入りませぬ。先はあらく、さあ〜御用ひなされぬかと申では、かないません。

御代の腹鼓

天地の誠の道は明けく、日月のめぐり違ひなく、春は花さき秋實り、目出度治る天が下、弓は袋に矢は箱に、鎧兜と云ふ物も、五月人形に見たばかり、屏風襖や繪草紙に、唐や日本の軍事、能や謡や芝居物、見たり聞いたりなぐさむも、今太平の御蔭ぞや。その辨へも荒磯の波間に遊ぶ鯛すゞき、雲間の鶴や鴨雉子、煮たり焼いたり、飲食に不足云ふたり好み事、是れなに故と尋れば、世のうきふしをしらぬ故、ひだるい寒いと云ふことは、乞食非人の身の上の事と計りに心得て、あれば有るほど足る事を、しらぬが上の驕り事、飯がいやなら砂糖餅、あんまとりとりきげんとり、誠の軍の切合をみたい物ぢやとあだ口も、あゝ勿體無や恐ろしや。昔度々大合戦、爰に矢さけび、彼處に石火矢、貝鐘太鼓関の聲、或は家を打こぼたれ、町も在所も焼き拂はれ、子の手を曳て遁るも有り、逆様に負て走る

有り、妻も夫も引別れ、枕並べんよるべもなく、中には腹に子をもちて、いつ沙時とも知らぬ身の、何國いかなる野末にて、いつ身二つに成ることぞ、雨のふる日も風の夜も、松の下ぶし草まくら、老も若も徒歩はだし、草鞋一足賣る家なく、寒うてもひもじうても、握飯一つ小判一兩で買ふと云ふても賣人なく、息もすうすう疋ひよろしく、にげゆく内に、流矢にてあへなく命果すもあり、さらるゝやら、つかるゝやら、話しに聞くも恐ろしや。扱て源平の大軍、ひよどり越のさか落し、八島の浦の舟軍、切つきられつ修羅の道、皆是れ雲の上の人、あらい風にもあてぬ身を、討死手負生捕られ、其外平家の御一門、或は姫君局方、花の姿も波の底、鰐しやちはこの餌食となる、あはれといふもおろかなれ。かくやんごとなき上々も、うき目つらき目數しれず、此の方々の身の上の難儀にくらべては、人の數にも入りがたく、蛇や蠅にも劣る身の、いかほど難儀するとても、露しづくとも思はれず、ましてつたなきわれは、そのことわりも辨へず、一つか二

つ不仕合せ、心に叶はぬことあれば、世の災難を我一人請取る様に思はあざれて、浮世を恨み身を嘆ち、神や佛に恨事、無性に苦むものぞかし。吉凶禍福は糾へる繩の如しと聞くぞかし、喜ぶ後は悲みあり、仕合あれば不仕合せ、生れたものは死ぬる筈、梅も櫻もちればこそ、又さく春もあるぞかし。皆是れ天の誠の道、夏はあついが夏の道、冬は寒いが冬の道、人には人の實の道、此の誠にさへ違はねば、家も齊ひ國治る、只此の誠にそむくやいな、家國天下大騒ぎ。それに今日われわれは、雨にもぬれず露うけず、一日食はずに居た事なく、一夜さ裸でねたことも、ないは如何なる果報ぞや。世の爲めになる事としては、一文がこともしたことなく、世界の邪魔になる事は、大分覺もあることよ。我のみならず、親や子や夫婦兄弟一つ家に、飢ゑず凍えず過すこと、御先祖父母の御めぐみ、又其上にありがたき、申すも恐れ多けれど、昔上々様方が、鎧兜や長刀かたなを命かけの御苦勞で、今この如く御泰平、農作すれば田畑有り、米粟粟稗なんなりと心まかせに作り出す、

山行き野歩きするとても、指一本さす者無く、江戸長崎へ行いたとて、こちらが無
 理云はねば、拳一つ打つ者なく、腹がへつたら一膳飯、日が暮れたらたご宿、
 河には橋がかけてある、橋がなければ船渡し、馬にも乗れる、駕籠もある、甘酒
 上燂鹽梅好し、あんまり御馳走過る故、終に御料理の喰過し、頭痛腹痛癢つかへ、
 節季に胸をいためたり、分散欠落首くくり、皆御馳走の喰過し、なんぼ御馳走な
 さるとも、腹が減らねばくはぬがよし、飲んでわるいは飲まぬがよし、云ふてわ
 るいは云はぬがよし、買ふてわるいは買はぬがよし、それで御腹が鹽梅好し、夫
 婦兄弟あん梅好し、寝ても起ても鹽梅好し、誠や目出たき天下泰平。

施行歌

今生富貴する人は。前生に蒔おく種がある。今生ほどこしせぬ人は。未來は極め
 て貧なるぞ。利口で富貴がなるならば。鈍なる人はみな貧か。利口で貧乏するを
 見よ。この世は前生の種次第、未來はこの世のたね次第。ふうき大小あることは。
 蒔たね大小あるゆるぞ。この世はわづかの物なれば。よい種えらんでまきたまへ。
 たねを惜みてうるざれば。穀物とりたる例なし。田畑に麥稈まかずして。麥稈取
 つたるためしなし。麥稈一升まきおけば。五升や一斗はみのるぞや。しかればす
 こしの施しも。果報は倍々あるものぞ。況やほどこしおほければ。果報も多しと
 計り知れ。それゆるお釋迦も觀音も。施しせよとすゝめたり。さすれば乞食非人
 まで。救ふころを發すべし。おのゝ富貴で持つ寶。有ればあるほどたらぬも
 の。おほくの寶をゆづるとも。持つ子が持たねば持たぬもの。少しも田畑ゆづら

ねど。持つ子はあつばれ持つものぞ。我子の繁昌祈るなら。人を倒さず施行せよ。
 人をたふしてもつたから。我子にゆづりて怨となる。ひとの恨のかゝるもの。ゆ
 づる我子が沈みきる。升や秤や算盤や。筆の非道をし給ふな。つねに商ひする
 ひと。あまり非道な利をとると。死んで三途に入ることぞ。その身は三途に落
 入て、屋敷は草木が生ひ蕃る。非道は子孫の害となる。親の悪事が身に酬ふ。世
 間に數々ある物ぞ。一門繁昌することは。親が悪事をせぬゆるぞ。もし又親には
 なれなば。ますく重恩思ひしれ。子を慈しむ親ごゝろ。あらい風をも厭ひしぞ。
 それほど親に思はれて。親をおもはぬおろかさよ。親に不孝な人々は。燕や烏に
 劣りたり。娘むす子をしつけるに。惜むたからはなきものぞ。親の後生の爲めな
 らば。その金出して施行せよ。飢死ぬ人を助けなば。これに勝れる善事なし。た
 とひ萬貫長者でも。死んで身につく物はなし。妻も子供もぜに金も。捨て冥途の
 旅立ぞ。冥途の旅立する時は。耳も聞えず目も見えず。ゆくへしらずに門をいで。

闇を闇路に入ることぞ。その時後悔限りなし。兎角命のあるかぎり。菩提の種を
 うゑたまへ。命は脆きものなれば。露の命と名づけたり。今宵頭痛が仕初めて。
 九死一生なるもあり。強い自慢をする人も。暮に頓死をするもあり。けふは他人
 を葬禮し。明日は我身の葬禮ぞ。然らば頼みなき娑婆に。金銀蓄へ何にする。富貴
 幸ひある人は。貧者に施しせらるべし。貧者に施しせぬ人は。富貴でくらすかひ
 もなし。狗でも口は過ぐるぞや。飢人貧者を助くべし。慈悲善根はその儘に。家
 繁榮の御祈禱ぞ。慈悲善根をする人は。神や佛にまもられて。天魔外道はよりつ
 かず。然れば祈禱になるまいか。よくく了簡せらるべし。惠施しならぬとは。
 餘りどうよく目にあまる。飢死ぬ貧者を見ぬ振に。暮す心は鬼神か。慈悲善根の
 なき人は。子孫繁昌長からじ。寶はあまりなきものぞ。施行で借錢し初めよ。そ
 れこそ眞の信心よ。上たる人をはじめとし。頭立たる人々は。われもくと共々
 に。厚く施行に身を入れよ。貧者の命救ふなら。廣大無邊の善事なり。平生貧者

に敬はれ。身につく果報あるまいか。人の喰物するのを。好んで捨ふてくふ者は。前生に種蒔たらぬゆゑ。是非なく袖乞することぞ。かゝる有様見ながらも。おのゝ仁心起らぬか。とにもかくにも人として。信心なければ人てなし。此節信心おこらねば。全く牛馬にことならず。

安心ほこりたゝ記

歸命頂禮御釋迦如來。やれゝ皆さん聞てもくんない。おらが親仁を何國の御人も。悉多太子がしらぬが佛か。若い時から商ひ好にて。親の譲りの家も位もすばんと打すて。十九の年から山へはひりて。迦蘭羅阿羅々の二人の仙人。師匠と頼みて菜摘水汲薪を樵てな。奉行勤めて元手をこしらへ。三十年目に初て店出し。華嚴と名づけて結構な代呂もの。賣てみたられば文珠と普賢の二人は買たが。あまり高くて其餘の御客は。盲か聾か見向もせぬから。是れではいかぬと分別仕替て。阿舎と名づけし安もの賣かけ。口上ひねれば店ささせはしく。御客が来るやら得意が附くやら。そこで追々代呂物仕入て。商ひ手廣に方等般若に。法華涅槃と御客の機を見て。夫々あてがふ商ひ上手に。須達と名をいふどえらい金持。滅法にほれこみ。祇園精舎と名を呼ぶ屋敷を。御釋迦にあてがひ店出しさしたら。早速

其名が諸方へひろまり。とてつもないほど商ひ繁昌。天上天下に一人親仁だ譽め
てもくんない。其時妙法祕密の精薬。法華の一法盛んに流行て。御若い幼様龍女
と申すが。これを買請とつくり吞込。成佛したとは我等の嫡とはどえらい違ひだ。
又々其時阿闍世と申した無敵の王様。提婆達多と心を合して。御釋迦の店をば仕
舞てのけよと。己が母者人韋提希夫人を。牢屋へおしこみ。御釋迦の代呂物買は
さぬ了簡。そこで夫人は不樂閻浮と此世を厭ふて。智慧も元手もござらぬけれど
も。五障三従かさなる大病。なほる薬があるなら下され御頼み申すと。遙に向ふ
て御願なされば。御釋迦は承知て五三の桐だよ。此様な客が大かたあらうと。四
十餘年の長の月日を。御蔵へ納めて仕込ておいたが。さらば是れから賣かけまし
ようと。阿難目連の二人の手代を左右に召連れ王宮さしてな出現なされて。韋提
希夫人に彌陀の本願他力の稱名。五劫兆載思惟の薬味を。ひとつに合した六字の
丸薬。一向専念産前産後にさし合ござらぬ。智慧も元手もさつぱりいらぬ。口

にまかせて唱ふるばかりだ。心相羸劣未得天眼。智慧が虚弱で元手のならない。
御脉も見ぬいた五障の重病。まして難治の極悪重病これらの性には。是れより外
には用ゆる薬は。さつぱりないぞと御勸めなされた。夫人は元より五百の侍女ま
で。無始より以來さとりし罪業。煩惱疑惑の癩氣の持病に。三世の諸醫師もお匙
を投げたり。其場で現益阿耨多羅々々。汗が流れて即日平癒。なんと皆さん六字
の丸薬用ひてみなさい。元手のいらぬが肝心要だ。あんまり無造作で祖父婆々だ
ましの店代呂物かたちつくり疑ひ。何ぞ利口な物はないかと知識に問ふたら。直
指人心見性成佛。御釋迦が則ち莞爾と笑へば。迦葉が莞爾と笑ふた請うり。是れ
が本法一嗣相傳。實の眼を開いて看れば。御釋迦も我等も是は何物。本来面目無
一物とは。こりやどえらい掘出し物だと。坐禪を始めてやりかけましたが。膝が
ぶり／＼ぶりつきますやら。眠りが来るやら。背をどやされ大きな御目玉。爰が
何でも心抱所と。きはつとみたれば。三年むかしに隣りへかしたる黒豆三合糠一

升。思ひだして妄念山々。これも我等が性にあはねへ。商賣かようと眞言祕密を。どの様な物だと尋ねて見たれば、阿字本不生で自身の胸にも阿字が備り。羅字は元より差別とわかれて。五智も五大も金胎南部も。此胸一つで父母の腹から生れた所が。直に佛の位でござんと聞くと其儘。オンアボキヤなどとやりかけたれども。元手も持たずに自力の商賣。阿字なものにてさつぱりしれねへ。そこで圓頓妙法蓮華即心成佛。扱ても無上の妙劑なれども。我等が根機に及びもないゆゑ。題目ばかりの功能看板。讀んでみたれど元手がなから代呂物買はれず。四十餘年の未顯眞實。何の事だと求めて見たれば六字の名號は法華經の略にて。藥王品には妙典八軸吞込時には。西方極樂阿彌陀の淨土へ。生れて行くぞと説てはあれども。何も勘定だ廻り廻りして遠道せうより。路銀のいらぬ南無阿彌陀佛を願ふが近道。なんと皆さんさうてはないかへ。鼠衣で二食でくらして戒行持つは。始末勘定利口な算用。しかし我等は蓋も虱も。とらずにおかねへ。手をは出して盜

はせねども。心に欲しくて目かけに持ちたし。娼もなければ子種がなくなる。嘘も少しはつかねばならぬし。酒も吞まねば婚禮振舞。萬事の附合世間が渡れぬ。何と是れでは五戒が持てぬ。外の商賣仕様かと思へば。根機と元手がなくては出来ねへ。どうでも親父の教へに歸りて元手のいらねへ六字の商賣。我等が根機につきり合います。出した元手が澤山あるなら。自力の商ひなされて御覽じ。細い元手ぢや一向いけない。棒でも折つたら逐地も去地も茶の木畑で。御迷ひなさろぞ。昔し咄しを聞ても見なさい。諸宗の祖師達。智慧も元手も澤山あれども。六字の薬をお捨はなされぬ。まして我等は。智慧も元手も根機もないから。自力の覺他力の御船に。乗るより外には分別ござらぬ。凡夫が其儘佛に成るとは。石や瓦が不思議に變じて黄金になるのだ。夫が嘘なら御寺の坊様に尋ねて御覽じ。何と皆さん嬉しいこんだぞ。儒道や神道や心學なんどの。外商賣から。あきなひ敵で。いろくさまく悪口いへども。我等が親父の仕にせの商ひ。格段違ふてどえらひ

もんだよ。根元本家は天竺横町。夫かれ唐土日本へ店出し。七宗九宗と弘めた代呂物。いやだといふたらそこらに居られぬ。恐れ多いが上々様でも。御用ゐなされる。六字の丸薬。朝夕忘れず用ゐて御覧じ。四海静かに現當繁榮子孫長久。今世の祈禱も來世の利益も。是れに過ぎたる薬はないぞへ。嘘はつかねへ是れ皆御釋迦の味噌では御座らぬ。本法の事だよ。ホ、オイホウ。

子守唄

子守り唄をばうたうて聞かしてや。うたやよい〜よい子に成るぞ。其子何處にと尋ねて見れば。どこに居るやら無明の闇で。ありか知れねど餘處では無いぞ。母の胎内に宿りしよりも。遂に離れず身に引き添ふて。熱い冷たいよしあし共に。差圖次第に任せて置けば。悪い事せず善い事ばかり。神も佛も外には無いぞ。されど日々悪智恵付いて。氣隨氣儘の手勝手仕出し。いつの間やら此子實に。凡夫頭巾を冠ぶせて仕舞ひ。あたら寶の持ちぐさらしよ。酒と色とに其身はたゞれ。遊樂夜あそび朝寝と小言。欲に目のない博奕の勝負。勝てば勝ちたし負ければ惜しく。山をこかさか山からこかさ。啞て世渡りや浮べる雲よ。榮耀榮華も昨日の夢ぢや。兎角正直正路に習へ。天地國王主人や親の。恩の重きに心をつけて。衣服食事に奢りをするな。寒うひだるう無ければよいぞ。家財諸道具かざりは入ら

ぬ。雨露にあたらず用さへ叶ひ。すめば住吉奢らぬ心。伊勢の太神三杵の御供。宮や芽音おごらすまいと。神の恵みのアラ有難や。貧と福とは天命なるぞ。知らて無理せば其身の過よ。心正直少欲なれば。貧は貧でも不足はないぞ。結句金持苦勞の種ぢや。へらすまいと貪欲すれば。親の金をも盗むに同じ。終に家庫空しく成るぞ。實へらさぬ工夫と言ふは。我身ついでに仁心發し。慈悲と情て人をば助け。家内眷屬一家を始め。友と知音も成丈すくへ。金は限りのあるものなれば。入るを計りて出すが好いぞ。儉と吝とをよく辨へて。儉は我身の奢を省き。吝は内外に辛き目みせて。不仁不義から爲す業なれば。我に足る事知らぬが故ぞ。餓鬼の苦患と言のはこゝよ。信さへありや貧者も仁は。出来るものだよ貪欲瞋恚。愚癡を離れりや皆慈悲心よ。身にも口にも意は猶も。人の助や世界の道に。よかれよかれとなすわざなれば。直に神なり菩薩の行よ。士農工商皆受け得たる。己が家職を大事にすれば。我と天地と相應いたし。四海兄弟他人はないぞ。しかも

佛の御法の教。きけば一切男子も女子も。共に生々のわが父母ぞかし。しかし他人の氣に入るとても。主と親とに背いた時は。神や佛の守は無いぞ。主は日月父母天地。之に仕へて忠孝すれば。神や佛を祈らずとも。常に身に添ひ守らせ給ふ。後生極樂外では無いぞ。子供ぐだてが大事で御座る。子供よければ我世を譲り。隠居したとこ安樂世界。現世安穩未來も淨土。後生願がたらはぬ時は。隠居しながら子の世話焼いて。鬼の呵責や閻魔の役目。親子諸共此世が地獄。子供始めは性善なれど。愛が過ぎれば氣隨に成るぞ。友を選ぶが先づ第一よ。友が悪けりや悪いがうつる。友が啗つきや啗つき習ふ。麻につれたる蓬の草よ。親の仕業が皆子に移る。親がよければ子供もよいぞ。親が欲なら子供も欲な。子供不幸で片親ないは。猶も育てが大事で御座る。父は興樂の慈の教訓に。母は抜苦の悲の愛憐よ。是が片よりや片輪に成ぞ。五體人なみ心は片輪。慈悲の二つを一人の親が。兼て勤めしたためしもあるぞ。むかし孟母は織りける機を切つて怒つて子を厲

ませば。其子一途に學師に事へ。今も孟子と尊ばるゝも。母の慈悲より起ると聞
 けば。子供しつけが大事で御座る。奉公さすなら情をかけな。殊に女子には教
 があるぞ。嫉妬深いと衣類のかざり。是も愚癡から起るといへど。母の仕方が皆
 従ふぞ。母の氣隨が娘に移り。母が奢れば娘も奢る。母が疝癩娘が短氣。母を習
 ふが娘の道よ。外へやろふが跡目にせうが。妻は夫に隨ふ習ひ。内を納むる役目
 となりて。氣隨氣儘に身勝手すれば。家内亂れてしゆらくら養へる。修羅の道こ
 そ猶遠ざげよ。假令夫は愚にあらと。神や佛や主人と頼め。舅姑我二親よ。下
 をあはれみ身を高ぶるな。夫婦和合は則ち天地。心正直内外の神よ。慈悲の佛に
 五ツの道は。人の人たる道こそ是よ。儒佛神道皆此事よ。寝るも起きるも立ても
 居ても。いかに如何にと一心不亂。信をこらせばよい子が知れる。年はいくつか
 無量壽ほとけ。いやな顔せずさて愛らしい。又と二人は無い御子さまよ。唐や天
 竺十方世界。どこも此の御子一人の沙汰よ。何宗角宗もひとつの月よ。須磨も明

石も姥捨山も。吉野龍田の紅葉も花も。外を尋る事では無いぞ。寒さ堪らへりや
 暑つさが来る。爰は娑婆とて堪忍國土。忍をなす故人ではないか。仕とも無いと
 も親孝行と。主人忠義と家業を勵め。是を堪らへて仕なれりや遂に。實に忠孝禮
 義に成ぞ。萬藝萬能學問とても。始め上手な物では無いぞ。すべて堪忍其功積り。
 妙に至りて師と仰がるゝ。昔南都の明詮僧都。學をうとんで夜の間に寺を。出で
 て雨降り大佛殿に。宿るあしたは雨強く降り。軒の雨だれ當りし石に。穴のあき
 しも天然自然。堅き石さへ穴あくからは。堅い文字もしばしば見れば。終に了解
 も成りそなものと。倦むを休らへて勤學あれば。法相一宗の知識とよばれ。今の
 代迄も名のかんばしき。仕たい事にはよい事無いぞ。啞か遊戯か奢りの沙汰か。
 色か博奕か朝寝か酒か。心よごれて地獄の種ぢや。是も休らへてせぬのがよいぞ。
 休らへさへすりや人には成ぞ。悪いくせよりよいくせつけよ。淨い汚いも分けた
 がよいぞ。地獄きたなし清いは淨土。神も佛も皆我なりと。我意を立れば則ち邪見。

家に傳はる宗旨を替へな。國の御法度先祖の家法。堅く守るは祈禱の札よ。欲な願て作善をこめる。神や佛は非禮を受けず。念佛題目經讀むととも。惡と欲心忘れの時は。やはり今生地獄に墮つる。在家却つて極樂往生。我を離れた香華の供養。僅か一食を備ふるととも。功德大いに罪咎のかる。思案分別皆妄想よ。我心自空は世尊の御法。有難いぞや忝じけないぞ。心清淨正念にして。日々新に日々うたへ。念佛題目子守の唄よ。此子大事に守さへすれば。生死離れて無漏土に至る。願ひ次第に十方淨土。寂光極樂いづれへなりと。儒佛神祖も手を引き給ひ。往きて生れて蓮の臺。終に子守も佛の位。家内安全目出度かりける。

白隱禪師言行錄 終

白隱禪師略年表

元	靈	御宇
2346	2345	紀皇
三	貞享 二	年號
寅 歲	丑 歲	支干 齡年
丙 二	乙 一	事
<p>十二月二十五日夜、駿州駿東郡浮島原野杉山氏に生る。</p>		歷
<p>生類恰みの令出づ〇九月、山鹿素行卒す〇九月龍泰寺紫山見雪寂す。</p>		局
<p>閏三月、妙超に大慈雲匡眞國師と加護す〇九月、「武德大成記」成る〇慈光、瑞芳「四分律行持鈔資持記」四十二卷を刻す。</p>		外
1686	1685	紀西

白隱禪師略年表

山		東	
2349	2348	2347	
二	元祿	四	
巳 己	辰 戊	卯 丁	
歲 五	歲 四	歲 三	
海濱に遊び浮雲の隠顯を見て世相の無常を感ず。	頗る強記にして小夜中山の村歌三百餘言を誦して一字も差へざりしといふ。	足初めて起つ。	
北村季吟、幕府歌學方となる○黄檗獨本性源寂す○鐵牛道機、京都淨住寺を再興す○惟慧道定、尾張萬松寺に住す。	幕府「四書直解」を刊行す○八月、一遍上人四百回忌を修す。	三月、護國寺亮賢寂す○四月、公慶、東大寺大佛殿再建を企て諸國を勸進す○七月、黄檗黄泉性激、「東國高僧傳」十卷を著す○十二月、天主教徒の來航を嚴禁す。	
1689	1688	1687	

山		東	
2352	2351	2350	
五	四	三	
申 壬	未 辛	午 庚	
歲 八	歲 七	歲 六	
	好んで寺に詣ず、一日、提婆品の講を聴き、家に歸りて翁婆のために覆講す。 専念行者、白隠に謂つて曰く汝奇骨あり、必ず世の福田とならんと。又三訣を教ふ。		
徳川光圀、楠氏の碑を湊川に建つ○冬、心越興備、水戸祇園寺に住す○高泉性激、黄檗山萬福寺に住す。	肥山道白、大乘寺を退く○八月、熊澤蕃山卒す。	七月、城北神田臺に大成殿造營○妙立慈山寂す○十二月、覺鑊に興教大師と諡す○永琢に佛智弘濟禪師の號を賜ふ。	
1692	1691	1690	

山		東	
2355		2354	
八		七	
亥	乙	戌	甲
歲	一十	歲	十
昌源寺に行て地獄の苦相を聽きて通身戰慄す。母に問ひてこの苦惱を脱せんとし天滿天神に誓す。			
二月、江戸大火、寺社多く焼亡す○五月、江戸本所羅漢寺を建つ○九月、心越與備寂す○十月、黄檗高泉性澈寂す○千呆性俊、黄檗山に住す。		閏五月、了也を大僧正に任ず、増上寺大僧正の始○六月、幕府、魚鳥の生あるものを賣るを禁ず○十月、松尾芭蕉歿す。	
1695		1694	

山		東	
2358		2357	
十一		十	
寅	戊	丑	丁
歲	四	歲	三
重れて父母に出家決定の願を陳ぶ。		柳澤山に登つて修練す。	
徳源均首座に依つて句讀を習ひ三月にして句雙紙を誦んず。			
八月、東叡山中堂に勅額を賜ふ○九月、江戸大火、東叡山二王門等焼く○十二月、増上寺録所僧服の華美を誡む。		正月、源空に圓光大師と識す○四月、東大寺大佛殿立柱す○十月、綱吉、増上寺に詣て衆僧の法問を聽く。	
1698		1697	

觀音の靈驗を聽き受持最も勤む。村樂を見て妙經の威神力を信仰す。兼れて父母に出家を乞ふ。

正月、月舟宗胡寂す○七月、了也、江戸城に大原問答を講ず○秋、月坡道印、靈隱寺に入る。

山		東	
2361	2360	2359	
十四	十三	十二	
巳 辛	辰 庚	卯 己	己
歲 七 十	歲 六 十	歲 五 十	十
正月十日受業師單繼傳公寂す。	初めて法華經を讀み頗る教旨を疑ふ。	二月二十五日、單繼傳公に就て得度、名を懸鶴と改む。 沼津の大聖寺に行き息道に侍す。	
正月、契沖寂す○竺信「洞門劇譚」を著はし宗勢を毀誹す。定山「獅子一吼集」を著はし之を破す。	六月、河村瑞賢卒す○八月、肥山道白等宗統復古を幕府に訴ふ○八月、黄蘗鐵牛遺囑寂す○十二月、徳川光圀卒す。	六月、役小角千年忌を筑前山に修す○十二月、木下順庵卒す。	
1701	1700	1699	

山		東	
2364	2363	3362	
寶永	十六	十五	
申 甲	未 癸	午 壬	壬
歲 十 二	歲 九 十	歲 八 十	十
春、美濃に到り瑞雲寺に馬翁に従事す。禪關策進を見て大に感奮す。 五月二十七日、母の訃至る。	大聖を辭し、州の清水の禪叢寺に掛錫し「江湖集」を聴き、巖頭渡子の話に參禪の巨益を疑ひ詩文に耽溺す。		
十二月、心阿「淨土本願高僧傳」八卷を著す○祐天、江戸傳通院に住す。	八月、肥山道白等の請により曹洞宗嗣法の制を定む○十一月、江戸大火、兩國回向院等焼亡す○十二月、義山「圓光大師行狀翼讀」六十卷を編成す。	加賀千代女生る○横井也、有生る○赤穂の遺臣大石良雄等吉良義央を殺し主仇を復す。	
1704	1703	1702	

東		山	
2365	二	2367	四
乙酉	二	丁亥	四
十二	二	三十二	二
春、瑞雲寺を辭し、洞戸の保福寺に南禪を訪ふ。秋、保福寺を辭して岩崎の靈松院に萬休を訪ひ、次て伊自良の東光寺に大巧に従ふ。	春、東光寺を辭して若州常高寺に抵り虛堂會に與る。夏、法弟松藏司と共に豫州正宗寺に行き「四十二章經」を見て感奮す。大愚の筆蹟を見て感奮し文筆を遠ざく。	春、正宗寺を辭し備後福山の正壽寺に抵り正宗贊會を終えて東に還る。伊勢に到りて馬翁の重病を聽き行て湯薬に侍す三月餘。十月國に歸る。	十一月、竺信寂す○不塗「護法資治論」十卷を著す○二月、寶井其角歿す○十月、服部嵐雲歿す。
閏四月、東大寺大佛殿上棟。○六月綱吉の生母桂昌院を増上寺に葬る○十二月、高泉性澈に大圓廣慧禪師と諡す。	正月、黃檗獨湛性登寂す○二月、忍濃等藏經の對校を始む○五月、明僧道宗、將軍綱吉に謁す。	忍徹、獅谷法然院に滿一萬日不斷念佛を修す。	
1705	1706	1707	

東		山		中御門	
2368	五	2369	六	2370	七
戊子	五	己丑	六	庚寅	七
二十二	五	二十二	六	二十二	七
春、越後高田の英巖寺に抵り性徹の「人天眼目」を聽く。二月十六日豁然大悟叫んで曰く巖頭現在と。四月英巖寺を辭して信州飯山に正受老人に謁す。十一月辭して松蔭寺に歸る。	春、遠州小山の能滿寺に托り圓海の「金剛經」を聽く。夏、州府の菩提樹院に在て頂門の「正宗贊」を聽く。冬、州の法雲寺に往く。	春、法雲寺を辭して松蔭寺に還る。州府の寶臺寺に碧巖會に預る。肺金を病み仍ち白幽真人を洛東白河山中に訪ひ内觀修養の訣を授かり松蔭寺に還る。秋、結城の節首座を請うて「臨濟錄」を聽く。	正月、綱吉を東叡山に葬る○二月、徳翁良高寂す○三月、東大寺大佛殿を廢す○十一月、新井白石天主教徒を鞫問す。	三月、和蘭通商の制を定め天主教の輸入を禁ず○四月、忍濃、大藏經の對校成る。	
1708	1709	1710			

門	御	中
2373	2372	2371
三	二	正徳
巳 癸	辰 壬	卯 辛
歳 九十二	歳 八十二	歳 七十二
正月、先師單嶺和尚の忌辰に値ひ偶あり。勢州建國寺に抵り義海の虚堂會に預る、因に古月を九州に訪はんとし途に荷葉園關の頌に入得す。若州の圓照寺に鐵堂を訪ひ夏を終ふ。次で河州の法雲寺に懸極を訪ひ去り泉州蔭涼寺に鐵心の遺風を尋ね壽鶴道人に逢ひ、女子出定の大事に撞着す。	息道の湯藥に侍して坐究怠らず、虚堂の偶を見て省語あり。夏、松蔭寺に歸りて「少室六門集」を講す。秋、八月二十四日息道寂す。	春、遠州の龍谷寺に祖き適ま「沙石集」を閲し感奮す。二月、下總佐倉の養源寺に抵り、次で宗圓寺に鐵髓に參じ、因に異僧長舟道人に遇ふ。十一月、息道の病を聽き大聖寺に歸つて看護す。
三月、驛路飛脚の制を定む○新井白石「采覽異言」を著す○十一月、家宣を増上寺に葬る。	正月、圓仁八百五十回忌を延曆寺に修す○四月、惟慈道定寂す○八月、靈元上皇落飾、法名を素靜と號す○隆慶「豐山傳通記」三卷を著す。	正月、源空の五百年忌を知恩院に修す○三月親鸞の四百五十回忌を本願寺に修す○十一月、忍波寂す。
1713	1712	1711

門	御	中
2376	2375	2374
享保	五	四
申 丙	未 乙	午 甲
歳 二十三	歳 一十三	歳 十三
岩瀧山に在りて刻苦す。○父宗整病あり、老奴來りて師を求め乃ち松蔭寺に歸らしむ。	春、三月秘達之地を求めんとして靈松院を辭して東濃の虎溪山に到り次で岩瀧山に上り宗淳道人に逢ふ。	春、蔭涼寺を辭して濃州に抵り再び保福寺に南禪に依り、夏を終る。大燈國師の語録を看る。○秋、保福寺を辭して復た靈松院に萬休に依る、一日經行中大悟あり。
四月、公辦法親王寂す○五月、家總を増上寺に葬る。	四月、家康の百年忌を日光山に修す○五月、上皇、義山を仙洞に召し和語燈錄を講せしむ。	三月、榮西の五百年忌を建仁寺に修す○八月、記山道白寂す○貝原益軒卒す。
1716	1715	1714

門	御	中
2379	2378	2377
四	三	二
亥 己	戌 戊	酉 丁
歲 五十三	歲 四十三	歲 三十三
春、南泉遷化の話に撞着す。○夏「破相論」を講ず。○冬、十一月、妙心寺第一座に轉じ白隠と號す。	正月十日單嶺先師の忌齋を以て松蔭寺に入院の式を整ふ。この時、松蔭寺頗る頹廢、侍僧のために「大悲書」を講ず、○秋、惠發藏司來り侍す。○冬、「禪門寶訓」を講ず。	大岡忠相、江戸町奉行となる○三月、蘭人通商の制を定め天主教の輸入を拒ぐ○十一月、義山寂す。
二月、聖徳太子の千百年忌を天王寺に修す。	七月、祐天寂す○七月、祖惠、三鳥派を唱へ竄せらる。	
1719	1718	1717

門	御	中
2382	2381	2380
七	六	五
寅 壬	丑 辛	子 庚
歲 八十三	歲 七十三	歲 六十三
夏、「原人論」を講ず。	林泉寺懸休來り參す。○冬、禪客二十人伴を結んで掛錫を乞ふ。○十月六日、正受老人寂す。	春三月、豆州吉名の温泉に浴する次で、因に馬蹄和尚に見ゆ。
三月、幕府、歴代年忌法會勅使参向を辭す。	六月、最澄の九百年忌を延暦寺に修す○九月、空也の七百年忌を空也堂に修す。	水戸、徳川宗堯、「大日本史」を幕府に上る。
1722	1721	1720

門	御	中
2388	2387	2386
十三	十二	十一
申 戊	未 丁	午 丙
歲 四 十 四	歲 三 十 四	歲 二 十 四
石井玄徳、杉澤宗信、來り參ず。	庄司氏察女、師に隨て參究す。	秋七月、習學を聽いて法華の深理に契當す。
五月、天主教を考察す。○光謙、卽心念佛の義を唱ふ。○正月、荻生徂徠卒す。	正月、暹昭の八百五十回忌を山科元慶寺に修す。○六月、鷲宿「淨土傳燈總系譜」三卷を著す。○八月、秀恕「洞上聯燈錄」十二卷を撰す。	三月、俊鈔の五百五十年忌を泉涌寺に修す。
1728	1727	1726

門	御	中
2385	2384	2383
十	九	八
巳 乙	辰 甲	卯 癸
歲 一 十 四	歲 十 四	歲 九 十 三
夢に母より古鏡を得、始めて如來眼、佛性を見ることを了知す。	夏、「傳山警語」を講す。	鐵髓來り宿す、その夜夢に地藏尊と商量す。
五月、新井白石卒す。○十二月、室鳩巢西丸奥儒と成る。	正月、英一蝶歿す。○隆光榮春寂す。○八月、登山紹瑾の四百回忌を總持寺に修す。○十一月、近松門左衛門歿す。	池大雅生る。○十一月、菅野彦兵衛義學を起す、幕府、國學を奨む、「論史餘論」成る。
1725	1724	1723

門	御	中
2391	2390	2389
十六	十五	十四
亥 辛	戌 庚	酉 己
歲七十四	歲六十四	歲五十四
夏、「四部錄」を講じ次て「寒山詩」を講ず。	夏、自撰の「寒林貽寶」を講ず。冬、十一月八日、信州の宗格首座寂す。杉山氏政女、師に就て參禪す。	脱上座、古郡兼通を伴ひて來り參す。秋、「普門品」を講ず。
清人沈南嶺、長崎に來り畫法を傳ふ。十月、日蓮の四百五十回忌を京都に修す。○洪慧「俱舍論指要鈔」十卷を著す。○日潮「木化別頭佛祖統記」三十八卷を著す。○法露「淨土折衝論」を作り僧濬の明導割を破す。	本居宣長生る。○僧濬、「念佛往生明道割」二卷を著す。	春、瑞方面山、若狹空印寺に住す。○石田梅巖、初めて心學を唱ふ。○天一坊改行斬に處せらる。
1731	1730	1729

門	御	中
2394	2393	2392
十九	十八	十七
寅 甲	丑 癸	子 壬
歲十五	歲九十四	歲八十四
春、鐘山、良哉來り參す。夏、鐘山のために「碧巖錄」を堤唱す。	春、密門の快俊、來り講す。秋、「禪門寶訓」を講じ、又た「神社考」を読む。	春、「應濟錄」を堤唱し、次て「碧巖錄」を舉揚す。
徳川吉保「禮儀類典」を獻す。○三月、空海の九百年忌を東寺に修す。○八月、室鳩巢卒す。○皆川淇園生る。	六月、荻生徂徠著「度量考」を版行せしむ。○八月、金工横谷宗珉歿す。○此頃諸國大に飢ゆ。	八月、靈元天皇崩去。十二月、元雄、五山の僧風を復興す。○僧濬、「金剛隨論」一卷を著す。○洪慧「集成論」十五卷を著す。
1734	1733	1732

町		櫻	
2400		2399	
五		四	
申	庚	未	己
歲六十五	歲六十五	歲五十五	歲五十五
春、松蔭寺に於て「虚堂録」を提唱す。		秋八月、豆州秋山古鑑居士の請に應じ「大慧書」を講ず。住庵の諸子、明春を期して虚堂會を勧發す、師、固く之を拒む。○比奈の石井玄徳の宅に入りて「息耕録開筵普說」を著す。	
四月、元棟、黄檗山に住す、邦人黄檗山に住するの始○新嘗祭を復す。		二月、釋風潭寂す○十一月、大嘗會を再興す。	
1740		1739	

町		櫻	
2397		2396	
二		元文	
巳	丁	辰	丙
歲三十五	歲三十五	歲二十五	歲二十五
冬。豆州臨濟寺の請に應じて「碧巖録」を提唱す。		春、惠通首座來り參ず。「維摩經」を講ず。○夏「碧巖録」を提唱す。○秋、松蔭寺に僧堂を建つ。○冬、植松季統、觀音寺の古基を開く。	
四月、中御門天皇崩去○九月、飛鳥山に櫻樹を植う。		二月、類聚國史を校訂せしむ○七月、荷田春滿、伊藤東涯卒す○柴栗山生る○八月、大岡忠相、寺社奉行となる。	
1737		1736	

町		櫻
2403	2402	2401
三	二	寛保
亥 癸	戌 壬	酉 辛
歳 九十五	歳 八十五	歳 七十五
<p>春、二月、圓慧來り參ず。○三月、「大慧武庫」を提唱す。○信州の劫運來り參ず。 ○江州の脱上座來り參ず。○九月息耕録開筵普説」上梓せらる。○秋、庫司再營を謀り、臘月に到て落成す。</p>	<p>夏、遠州龍潭寺の請に應じて「禪門寶訓」を講ず。</p>	<p>甲州桂林寺に赴き、「碧巖集」を評唱す。</p>
<p>六月、尾形乾山歿す。</p>	<p>正月、田安宗武に式内染織を賜ふ○十二月、覺饒の六百年忌を智積院に修す。</p>	<p>正月、「武藏編年集成」成る○六月、本所羅漢寺に法問論議、將軍吉宗臨駕○面山瑞方、永福庵を開きて隱棲す。</p>
1743	1742	1741

園 桃	町	櫻
2406	2405	2404
三	二	延享
寅 丙	丑 乙	子 甲
歳 二十六	歳 一十六	歳 十六
<p>春、二月、清水の禪叢寺に赴き「法華經」を講ず。 秋「寒山詩闡提紀聞」を上梓す。</p>	<p>春二月、甲州の自得寺の請に赴き「維摩經」を講ず。 井上平馬の因縁により「十句觀音經」を弘む。</p>	<p>春、二月、初めて「息耕録開筵普説」を繕く。○冬、甲州の自性寺に在り、般若心經の活字版を開く。歸程に林泉庵に「川老金剛經」を講ず。</p>
<p>賴春水生る○三月、齒人通商の制を定め天主教の輸入を防ぐ。</p>	<p>九月、將軍吉宗退隱し、家重之を襲ふ。</p>	<p>九月、心學者石田梅巖歿す。</p>
1746	1745	1744

園		桃	
2409	2408	2407	
二	寬延	四	
巳 己	辰 戊	卯 丁	
歲 五 十 六	歲 四 十 六	歲 三 十 六	
<p>「槐安國語」を著す。○葦原の文殊堂に赴き、「臨濟錄」を講ず。○夏、「碧山集」を提唱す。○黄檗の格宗來り參じ、「曹洞五位」を請益す。○冬、十一月、圓慧再び參ず。○臘月、武州岩付の雲門庵に赴く。</p>	<p>春、山梨重治來り謁す。○夏、五位の秘訣を發明す。○十一月、駿州臨濟寺開山本光國師の二百回忌に隨喜し、「息耕錄偈頌」を評唱す。</p>	<p>織田信茂來り參ず。</p>	
太田南畝生る。	<p>正月、德濟、仙洞に禪要を説く。○六月、朝鮮の使節を引見す。</p>	<p>五月、太宰春臺卒す。○七月、行基の二千年忌を周防國分寺に修す。</p>	
1749	1748	1747	

園		桃	
2412	2411	2410	
二	寶曆	三	
申 壬	未 辛	午 庚	
歲 八 十 六	歲 七 十 六	歲 六 十 六	
<p>春、松隆寺に在て「碧巖錄」の遺講を評唱す。○四月八日、比奈の新無量寺落成す。○秋、豆州歸一寺に赴き、「佛光錄」を擧揚す。○冬、世繼氏佛舍利を無量寺に寄せ、師を請して「遺教經」を聽く。</p>	<p>春、備前岡山少林寺の請に應じ、「川老金剛經」を講ず。次て井山の寶福寺に「四部錄」を講ず。歸路、京都に入り世繼氏に謁す。池大雅來り參ず。及び大橋女を度す。尋て復た花園に登り養源院に「碧巖錄」を講ず。○八月、於仁阿佐美」を著し、「遠羅天笠」を上梓す。○冬、庵原大乗寺に到り、「碧巖錄」の遺講を講ず。時に、「五位秘訣」を編す。會中に難を發し瘡を受く。○香林寺に「碧巖錄」を評唱す。</p>	<p>春、庵原大乗寺の請に應じ、「碧巖錄」を提唱す。○四月、「寶鏡窟記」を著す。○七月、「槐安國語」を上梓す。○秋、遠州貞永寺に抵り、初めて「槐安國語」を講ず。○冬、播州龍谷寺の請に赴き、「息耕錄」を評唱す。○惠牧、熊野を出て來り再び參ず。○世繼政幸、京都より來り參ず。</p>	
<p>龜田鷲齋生る。○十一月、秀恕寂す。</p>	<p>古月禪材寂す。壽八十五。○閏六月、吉宗を東觀山に葬る。○八月、春東、異安心を唱ふ。</p>	<p>四月、櫻町天皇崩去。壽三十一。○古賀精里生る。○八月、疎石の四百五十回忌を天龍寺に修す。</p>	
1752	1751	1750	

園		桃	
2415	2414	2413	
五	四	三	
亥 乙	戌 甲	酉	癸
歲 一 七	歲 十 七	歲 九 十 六	
春、庵原郡龍津寺に赴き、維摩經を講ず。○秋九月、植松氏秋葉三尺坊を觀音寺に勸請し、師を請して慶讚を修す。		春、甲州能成寺の請に赴き、「人天眼目」を提唱す、畢て東光寺に赴き、「毒語心經」を講演す。この會に於て正受老人の三十三回忌を修す。福王、南松、慈眼等の請を歴て、臘八に松蔭寺に歸る。	
古稀の壽筵を開く。		十一月、寶曆曆を頒行す。	
三月、聖武天皇一千年忌を東大寺修す。○九月、足利學校焼く。○十一月、本願寺祕事法門の徒を罰す。		七月、林大學頭信充辭し子信吉大學頭と稱す。○八月、畫人彭城百川歿す。	
1755	1754	1753	

園		桃	
2418	2417	2416	
八	七	六	
寅 戊	丑 丁	子 丙	
歲 四 十 七	歲 三 十 七	歲 二 十 七	
春、瀧州瑠璃光寺の請に赴き大圓寶鑑國師百年忌を豫修す。「寶鑑胎照」を著す。會畢つて龍門、林泉、妙樂の三請に應じ、伊勢桑名に出で、白子の龍源寺「寶藏論」を講ず、遂に遠州地藏寺に「虛堂頌古」を評唱し、冬、松蔭寺に歸る。○夏、「辻談議」を著す。○八月、「荊叢毒藥」を上梓す。		春、松蔭寺に在て「楞嚴經」を講ず。○夏、四月安倍郡高林寺の請に赴き、大應國師四百五十回忌を修し「大應錄」を評唱す。會畢つて江尻の慈雲寺に抵り「寶鏡三昧」を評唱す、次で庵原に在て「心經著語」を講ず。「荊叢毒藥」の編輯成る。	
正月、「夜船閑話」を著す。○春、甲州南松寺に赴き「槐安國語」を提唱す。次で信州興禪寺に赴き「法華經」を講ず。次に開善寺、龍翔寺の請に赴き、三州淵龍寺を経て松蔭寺に歸る。		九月、澁川大水、浮島十三重石塔流失。○十月、竹田出雲歿す。	
六月、中井鏡庵歿す、竹内式部捕へらる。○八月、田沼意次を諸侯に列す。		七月、梁田蛭巖歿す。○此頃杉田玄白西洋外科術を唱ふ。○十二月、玄翁妙心寺に住す。	
1758	1757	1756	

町	櫻	後
2424	2423	2422
明和	十三	十二
申 甲	未 癸	午 壬
歳 十 八	歳 九 十 七	歳 八 十 七
八十の壽筵を開く。○二月、末後の會を開き「大應錄」を評唱す。○七月、後事を遂翁に附す。	春、正月、微恙を示す○二月、祥光寺の請に應じて「碧巖錄」を提唱す。又た江梨の航浦院に入り「碧巖錄」の遺講を終ふ。○三月、江尻の慈雲寺の請に應じて「松源錄」を評唱す。	秋、八月、澤田の大中寺に東嶺の心經會に赴き隨喜す。尋いで青龍寺の請に應じて「虛堂錄」を講ず。
敬光「西遊篇」二卷を著す○智遇「本尊義」を著す○普寂「俱舍論要解」十二卷を撰す。	七月、本願寺、桑洲三重口授の邪義を糺明す○賣茶翁元昭寂す。	七月、桃園天皇崩去○大順「曇茶羅攪玄疏」七卷を著す○八月、山脇東洋歿す。
1764	1763	1762

園	桃
2421	2419
十一	九
巳 辛	卯 己
歳 七 十 七	歳 五 十 七
九月、龍澤寺易地工就る乃ち行いて説法す。	春、伊豆龍澤寺成る○三月、「毒藥遺編」を附刊す。○七月、江戸深川の臨川寺に入る、復た東淵寺に往いて前會の遺講を終ふ。○十二月、無難の遺蹟を獲て歸る。○「八重葎」を著す。
正月、源空の五百五十年忌を智恩院等に修す○三月、親鸞の五百年忌を東西本願寺等に修す○三月、蘭人通商の制を定めて天主教の輸入を防ぐ○七月、家重を増上寺に葬る。	春、二月、龍澤寺に「息耕錄」を講じ、兼れて開山の儀を擧ぐ。○四月、東嶺京都より歸り來り龍澤寺に住す、○秋、東嶺、龍澤寺易地の工を起す。
二月、江戸大火○七月、將軍家重、職を家治に讓る。	九月、關山慧玄の四百回忌を妙心寺に修す○十一月、本願寺「和字祖語」を刻す○欽光、生駒山に普賢行願發般若心經阿彌陀經等の梵本を讀み七九鈔五卷を撰す○服部南郭卒す。
1761	1759

後	櫻	町
2425	2426	2427
二	三	四
乙酉	丙戌	丁亥
八十一歳	八十二歳	八十三歳
<p>春、正月、龍澤寺に在て舍利會を修す。○三月、松蔭寺に在て病に臥す。東嶺、江戸に下り至道庵を復興し、六月に至り師を遊ぶ。</p>	<p>正月、請眼牌を掛く。○東嶺、復た師を遊ぶ乃ち江戸に入り二月至道庵に入る○六月、衝梅老師請益の碧巖録を繕寫し之れを評唱す。○七月、三島の福聚院の請に應じ法華三周會を開く。復た玉井寺の請に應じ、前會の遺講を終ふ。○冬、松蔭寺に歸る。</p>	<p>春夏の際、古名の温泉に浴す。○冬、十月、龍澤寺に在て「荆叢毒藥」を提唱す。</p>
<p>三月、榮四の五百五十回忌を建仁寺に修す○玄喬の「一華五葉」刻成る。</p>	<p>六月、本願寺本尊義評論起る○十月、天主教徒査檢の制を定む○普寂「法苑義林章纂註」七卷を著す。</p>	<p>五月、功存繼成等、知運と本尊義に付き對論す○敬光「唐房行履録」三卷を著す○八月、藤井右門、山縣大貳死刑に處せられ式部流さる○曲亭馬琴生る。</p>
1765	1766	1767

白隠禪師略年表終

後	櫻	町
2428		
五		
戊子		
八十四歳		
<p>龍澤寺に在て春を迎へ。徳樂寺の請に應じて「荆叢毒藥遺編」を講ず○三月、松蔭寺に歸る。○六月、靈元天皇の尊牌を龍澤寺に迎へ、安牌の慶讃を修す。○十二月十一日、松蔭寺に在て示寂。</p>		
		<p>十一月、石見濱田の諸宗徒、一向宗を天主教と誣ゆ幕府之を罰す。</p>
		1768

勅 萬仍芙蓉卓現海隅。峯分八葉根蟠三州。至清之氣、神秀之象。集大成者。爰大寂常照禪師遠胤、白隱座元。間出偉人、格外名僧。深入正受大圓鏡、沒寶明。親徹本光無盡燈、發靈焰。勘破東山暗號令。鋪張南浦毒爪牙。留下室內救弊之微言、道行四海。成褫菴居參禪之真種。化旺十方。可謂天澤雲彌、龍澤注霖。少林春回、鶴林垂蔭。師之德音洋洋盈耳。簡加褒章。諡曰神機獨妙禪師。

明和六年己丑六月八日

大正四年十二月二十九日印刷

大正五年一月一日發行

白隱禪師言行錄

正價金壹圓

著作者 高橋定坦

發行者 伊東芳次郎

東京市牛込區神樂町一丁目一番地

印刷者 細萱武四郎

東京市芝區愛宕町三丁目二番地

印刷所 東洋印刷株式會社

東京市芝區愛宕町三丁目二番地

發行所

東京市牛込區牛込見付前

電話番町五三七
振替東京一七一

東亞堂書房



理學博士 近重眞澄先生著 — (東亞堂發行) —

禪學眞髓

縮刷美本全一冊
紙數約四百頁
正價金壹圓
送費金八錢

近重博士は我國理學界の先覺として職に京都帝國大學にあり、されど先生の半面は物庵居士と號して禪林に遊歩せらる、其平生の蘊蓄を傾倒し來りて、紙背に聲あるものに實に禪學眞髓一篇となす、先生本書に題して曰く『佛法本と多子なし、多子なしと雖も猶ほ三界に流通す、乃ち舌頭を糜爛して此の老婆禪をなし、敢て兄弟の爲めに眉毛を惜まず、古人謂ふ所の莫道官途人役々、一年三度到梅花といふ者、予豈に敢て自ら居らん乎』と蓋し先生の禪學觀は收めて此の一巻に存す、今や世は靡然として禪に赴く、此時に當りて此の好著あり、速かに其眞髓を觀取せられよ。

忽滑谷快天先生著

禪學講話

正價六十錢
送費八錢

忽滑谷快天先生著

清新禪話

正價五十錢
送費六錢

忽滑谷快天先生著

養氣鍊心の實驗

正價八十錢
送費八錢

加藤咄堂先生著

禪學觀

正價七十五錢
送費八錢

加藤咄堂先生著

文字禪

正價五十錢
送費八錢

加藤咄堂先生著

和譯詳註 碧巖錄

正價一圓八十錢
送費八錢

加藤咄堂先生著

冥想論附坐禪論

正價五十錢
送費八錢

破魔禪居士著

禪と活動

正價四十五錢
送費六錢

釋悟菴師著

禪と修養

正價五十錢
送費八錢

足立栗園先生著

膽力の鍊養

正價五十五錢
送費八錢

— (東亞堂發行) —

福本日南先生著

直江山城守

正價一圓廿錢
送費八錢

碧瑠璃園先生著

由比正雪

前篇一圓十錢
後篇一圓廿錢
送費各八錢

碧瑠璃園先生著

山鹿素行

正價八十錢
送費八錢

幸田成友先生著

大鹽平八郎

正價一圓十錢
送費十二錢

青山霞村先生著

深草の元政

正價七十錢
送費八錢

和田天華先生著

坂本龍馬

正價一圓十錢
送費十二錢

山路愛山先生著

佐久間象山

正價九十五錢
送費八錢

福本日南先生著

黑田如水

正價一圓五十錢
送費十二錢

山路愛山先生著

武家時代史論

正價六十錢
送費八錢

鹽見戈山先生著

偉人の風化

正價五十錢
送費六錢

破魔禪居士著

偉人の修養史

正價六十錢
送費八錢

中村徳五郎先生著

我等の祖先

正價一圓廿錢
送費八錢

—(東亞堂發行)—

325
387

終